



郷土史への扉

「人国記」という本があります。だいたい室町時代後期の作品だろうといわれていますが、いつ誰が書いたか詳細は不明です。この本は今でいうところの「県民性」のはしりでしょう。古い言い方をすると「お国柄」とでもいうのでしょうか。どこの国の人はこんな人だ、という内容です。

大隅・薩摩国については意識すると次のとおりです。

『大隅・薩摩両国の風俗は違うところはない。みんな死を表にして、ただ男子は死ぬことを道理だと思っていて、五常の道（儒教で人の守るべき五つの徳）。仁・義・礼・智・信の五つの徳』というのはいささか関係ないことと思っ

ている。仏法という死んでから後の細かい話だと考えているので、人の生き死にとは何かということについては役に立たないと自分の勝手な判断で遠ざけている。いつも主君と家臣の作法もあってないようなもので、主君という名だけは知っているが、侍は給料をくれる人のことを主君だと思っ

百姓は地頭（百姓から税金を徴収する役人）が偉いとしか知らず、無礼な行動は挙げていってもきりが無い。武士が戦場で死ぬのも、主君への忠義のために死ぬというのが素晴らしいということではなく、ただ武士は戦場で死ぬものだとばかり考えていて、どうして戦場で死ぬのかなど話を

する様子もない。平和なときは主君が姿勢を正しくしているにも関わらず、家臣は足を伸ばす者や立ちながら主君と雑談をする

# 鹿児島人の性格

者もたくさんいる。末代までずっとこのような風俗である』と散々書かれています。

つまりこの本によると室町時代末のころの大隅・薩摩の人々は、

- ① 戦場で死ぬことしか考えていない。
- ② 宗教なんかどうでもいい。
- ③ 道徳は分かっている、自分には関係ないと思っ
- ④ 目上の人を敬う気持ちがない。

さらに、江戸時代の『新

大隅・薩摩は同じとしつつも、薩摩の条には「子供のつまらないけんかでも、負けたときには父親が子供に死をすすめることがあるらしい」と書かれ、「死を恐れないのは勇猛だけど、物事の善しあしを考

えないことはよくないことだ」と書かれています。

そもそも南九州においては縄文の昔から狩猟を中心に、時に厳しい自然とうまく付き合

いながら、温暖な気候に恵まれたおらかな人々だったに

違いないと思われ

ますが、人国記の書かれた頃は殺伐とした人々のようなイメージを受けます。古代、隼人が朝廷に支配されていく過程で狩猟や航海を中心とした生活から稲作に転換し、それを税として納めるようになったからなのかと考えさせられます。シラス台地は稲作にはとても不向きな土壌で、江戸時代以降も鹿児島県民は貧しさに耐え続けました。

このような苦勞の中で豪快な気性の激しい部分と控えめで忍耐強い部

分を合わせもつ性格となったのでしよう。ただ、器が大きかったり小さかったりするよう

で、戦国時代は敵味方問わず戦死者の供養をしていて、朝鮮出兵の際には島津義弘らが両軍の供養のために高野山に供養碑を建立していま

す。その一方で、鹿児島中央駅前の「若き薩摩の群像」というモニュメントがあります。幕末、極秘でイギリスに留学した若い人たちの銅像です。本来19人いなければいけないところ二人足りません。この二人は高知と長崎出身の人で一緒にイギリスに留学し、その後鹿児島に住んだのになぜか外されています。県外の人はお断りということなのでしょう

か。もしそうだとすると、器が小さいと思われても仕方がないでしょう。

先日、ある日本史の先生とお話をしていたところ新幹線の話になりました。その時に、「みずほ」も「さくら」もヤマト的でハヤトらしさがないとおっしゃっていました。大和朝廷が肥沃な土壌で稲作を始め、力をつけていったことと「瑞穂」という言葉には関連があるのです。そう考えると稲作には適さないシラス台地をもち、近年まで土壌改良で苦勞し続けた南九州の人々にとっては嫌味な気が

します。気にしすぎかもしれません。